

Ⅱ 臨床病理

脳卒中は脳の血管が破れたりつまったりして起こることは誰でも知っている。しかし、ではなぜそのような血管の障害が起こるのか、そのような急激な変化が起こる前に、長い時間をかけて少しずつ血管に何らかの異常が積み重なってきているのではないのか。そしてそれが脳卒中という急激な変化に至るにはどんな条件が加わってのことであろうか……このような疑問はきりもなく続く。こうした脳の血管病変の謎についての最近の研究の進歩を村上論文は手際よく概観してくれている。

脳はよく巨大なコンピュータにたとえられる。そのコンピュータのどの部分がこわれたら、外にはどのような機能の障害としてあらわれてくるのか。本誌ではさきに亀山¹⁾がおもに運動障害について脳障害部位と臨床症状との関係を論じたが、永江論文はやや違った角度から、PT・OT界でしだいに注目を集めつつある失行・失認・失語などの高次脳機能の障害に重点をおいて脳障害部位との関連を詳細にのべている。

臨床病理としては、この他に急性期（発作時）の症状からの脳卒中の種類と部位の診断、脳卒中の予知、他の疾患との鑑別などがあるが、成書²⁾を参照されたい。

参考文献

- 1) 亀山正邦：脳卒中の病理と臨床症状：理学療法と作業療法，4（4），233，1970.
- 2) 亀山正邦・田崎義昭：脳卒中，医学書院，1969.

脳血管障害の病理と病態生理.....	村 上 恵 一	404
脳障害部位と局所症状.....	永 江 和 久	409